

## 聖マリアンナ医科大学(前期) 英語

2024年 2月8日実施

[ I ]

[1] (1) (c) (2) (b) (3) (a) (4) (d) (5) (b)

[2] the Japanese wolf

[3] (a) 9頭のニホンオオカミと、柴犬を含む11頭の日本犬の完全なゲノム

(b) (a)のゲノムを、(キツネ、コヨーテ、ディンゴ、オオカミ、そして現代の世界中の犬など) イヌ科のさまざまな動物について入手可能なゲノムと比較した。

(c) ニホンオオカミは、他の犬やオオカミとは区別される独立したグループであることが明らかになった。

[4] イヌが家畜された場所は東南アジアかシベリア北東部のいずれであるかの論争があるところ、テライの研究はそのいずれかであることを示しており、西欧や中東といった地域ではないことを裏付けている。(92字)

[5] dogs

<講評>

ニホンオオカミの起源について論じた英文。例年通り、本文中で取り上げられた研究の手続きや結果について論述する問が出題された。[4]は100字とやや重めの論述であるが、参照すべき箇所は明白であり確実に回収しておきたい問題。

<解説>

[1] (a) reach Japan 「日本にたどり着く」という表現から route 「経路」を選ぶ。

(b) 「(絶滅したと) 考えられていた」という受け身の意にしないと通らない。

(c) 本段落第1文の記述を見れば自明。

(d) share A with B 「AをBと共有する」を問うている。

(e) 空所後ろには名詞句しか存在しないため、前置詞の despite しか文法的に不可。

[2] 指示語 it はもちろん前出の単数名詞を指すが、それに加え、この文章そのものがニホンオオカミの起源について紐解いたものであることが読めていれば容易。

[3] (a) 第5段落第1～2文に記載あり。

(b) 第5段落第3文前半に記載あり。

(c) 第5段落第3文後半～第4文に記載あり。

[4] 第7段落の、下線部以降最後まで記述をもとにまとめればよい。

[5] 第1段落最終文の a vanished population of gray wolves in East Asia that also gave rise to modern dogs がヒントとなる。

[ II ]

[1] (c) [2] (c) [3] (d) [4] (d)→(b)→(e)→(a)→(f)→(c)

[5] [C] [6] (d) [7] (c) [8] (b), (e)

<講評>

スピルオーバー(自然宿主から自然宿主でない生物へウイルスが直接うつること)について

論じた英文。医学的内容であるが、高度に専門的な語彙が使われているわけではないため比較的取り組みやすいだろう。形式はいずれも選択式。

<解説>

- [1] 本文全体の趣旨、あるいは特に第 6 段落第 1 文の “Finding enough food can help prevent spillovers” を読み取ることで正答に至れる。
- [2] (2a)は immune system 「免疫系」について触れているため、病原体を封じ込めるという意味であることが推測でき、(a)と(c)が候補になる (keep ~ in check で「~を抑制する」)。逆接の But を跨いだ(2b)はそれとは逆の意味合いになるはずなので、trigger 「~の引き金になる」が適する。
- [3] 後ろに such as climate and habitat という例示があることから判断する。
- [4] (a) : 「食べ物を求めて森を去る」とあるので、これの前に食べ物が不足するという内容が必要 → (e)の後ろと判断できる。  
 (b) : This climate event 「この気候上の出来事」の指し示すものが前に必要 → El Niño 「エルニーニョ現象」について述べた(d)の後ろと判断できる。  
 (c) : these farms の指し示すものが前に必要 → 唯一 farms について言及した(f)の後ろと判断できる。  
 この時点で、(e)→(a)、(d)→(b)、(f)→(c)は確定。(b)の hotter and drier な気候は、(e)のような結果につながるものが推測できるため、(d)→(b)→(e)→(a)。さらに、(f)の「最終的に近くの農場に至るものもいるかもしれない」は、(a)の移動の結果と捉えることができるため、ここで解答が定まる。wind up は「(意に反して)結局~することになる、最後には~に至る」という意味の表現。
- [5] 本文中の this shift という表現を見て、その直前にある[D]を選びたくなるが、[C]と[D]に挟まれた文の “they now spent more time near farms in search of food” は、“hungry bats shifted their behavior” の具体的内容であることが推測できる。また、“Without their main food source” は、[C]の前の文の “This reduced the number of trees that flower in winter” を受けての記述と考えるのが自然なので、この点からも[C]に補うのが妥当と言える。
- [6] 「オーストラリアは、……人々が自然地域を破壊している場所の一つに過ぎない」という字義通りの意味が捉えられれば容易に解ける。
- [7] [1]の解説とも関連するが、こうした動物が病原体を拡散してしまうのは、彼らの食物が不足した場合である。
- [8] (a) 第 2 段落最終文に矛盾。  
 (b) [1]の解説通り、本文全体の論旨に合致する。  
 (c) 第 5 段落第 4 文に Eucalyptus については言及があるが、such as ~ と単なる例示として挙げられているだけであって、“primarily feed on” とまで言い切れるエビデンスに欠ける。

(d) 第3段落第3～4文より、75%という数字は馬に感染した場合の致死率であって、人に感染した場合の値ではない。

(e) 第5段落の論旨に合致する。

[III]

[1] (1) (a) (2) (a) (3) (c) (4) (c)

[2] (d)

<講評>

与えられたシチュエーションに対応する英文として正しいものを選ぶ問題。問題文に“in terms of grammar, logic and context”とある通り、文法・文脈の両面から適切なものを絞り込む必要があることに注意する。

<解説>

[1] (1) (a) 正文。queue は line のパラフレーズで「列」の意。

(b) stand for は「～を象徴する」の意なので不適。

(c) “You are not sure if ... or not” という問題文の条件に整合しない。

(d) come for shopping という表現はない。come shopping ならば可。

(2) (a) 正文。

(b) make up for ～ は「～の埋め合わせをする」の意であるが、指示語 it は直前の単数名詞、すなわち my ID card となるため不適。

(c) 「何か手続きは必要ですか？」という意味になるが、持参必須の ID カードを忘れたという時点で何らかの手続きが必要なのは自明であり、最も適切な答とは言いがたい。

(d) advice は「忠告、助言」の意であり、最も適切な答とは言いがたい。

(3) (a) help you for the dishes clean が奇妙な表現。help you with the dishes であれば通る。

(b) be about toV 「今にも～しようとする」の誤用。cleaning→clean であれば可。

(c) 正文。

(d) then は接続詞ではなく副詞であるため、節どうしを結ぶことはできない。

(4) (a) 「～までに」を表す期限の by と「～まで」を表す継続の until を使い違えている。

(b) まったく勉強をしていないという状況設定に整合しない。

(c) 正文。

(d) nothing は代名詞であり、homework を修飾することはできない。

[2] メール本文から、台風のためキャンプの日付が改められたことが読み取れる。

【総評】

記述式長文＋選択式長文＋正文選択という例年通りの大問構成。90分という試験時間に比べて分量は控えめであり、じっくり腰を据えて取り組むことができたであろう。一次通過ラインは、70%程度か。

本解答速報の内容に関するお問合せは



医学部専門予備校

YMS

03-3370-0410 <https://yms.ne.jp/>  
東京都渋谷区代々木1-37-14

医学部進学予備校

メビオ

0120-146-156  
<https://www.mebio.co.jp/>

医学部専門予備校

英進館メビオ 福岡校

0120-192-215  
<https://www.mebio-eishinkan.com/>

メルマガ登録または LINE 友だち追加で全科目を閲覧

メルマガ登録



LINE 登録

